JAFスポーツWEB

2019年全日本カート選手権 FS-125部門／FP-3部門 東地域第1戦
2019年ジュニアカート選手権 FP-Jr部門／FP-Jr Cadets部門 東地域第1戦［JAF公認No.2019-1803］

開催日：4月13～14日　開催場所：ツインリンクもてぎ北ショートコース　格式：国内／準国内　主催：RTA［クラブ登録No.公認81303］

フォト／友田宏之、JAFスポーツ編集部　レポート／水谷一夫

開幕からルーキーが躍進！ FS-125部門東地域は小林利徠斗が制す!!

28台がエントリーしたFS-125部門は初戦から波乱の幕開けとなった。

2019年の全日本カート選手権シリーズは、西地域に後れること2週間、東地域もツインリンクもてぎ北ショートコースで開幕を迎えた。

FS-125部門の決勝でスターティンググリッドの最前列に並んだのは、FP-Jr部門から上がってきたルーキー2人。ともに13歳の荒尾創大選手と小林利徠斗選手だ。そして26周のレースは、劇的な決着となった。

ポールの荒尾選手は先頭のポジションを守ったまま発進。そのテールにやがて全日本2年目の渡部智仁選手が追い付き、レースは中盤からこの2台のトップ争いとなった。逃げる荒尾選手は気温が予想外に下がったことでオーバーステアの症状に悩まされながらも、懸命に首位をキープ。追う渡部選手もタイヤの摩耗に苦しみながら、終盤の逆転を期して荒尾選手に食い下がる。

レースが終盤戦に入ると、その2台にひたひたと接近してくるマシンが。スタートを決められず6番手に後退、そこから「速く走ることしか考えていなかった」という無心の走りで3番手まで挽回してきた小林選手だ。

残り4周、渡部選手が意を決して荒尾選手の前へ。すると、荒尾選手が翌周にトップを奪い返す。2台がいよいよ本格的な戦いを始めると、そこに小林選手が急接近。最終ラップにはとうとう3台が一丸となった。

最後のオーバーテイクポイントは、ゴールまで残りふたつのコーナーとなる左へアピンだ。ここで渡部選手が荒尾選手に勝負を仕掛けると、小林選手も自分の接近に気付いていない渡部選手を急襲。3台はもつれるようにフィニッシュラインへとなだれ込んだ。真っ先にチェッカーを受けたのは荒尾選手。そこから約0.2秒後れて、渡部選手と小林選手がまったくの同タイムでチェッカーを受けた。

最後のドラマは車検場に待っていた。優勝したかに思われた荒尾選手は、熱闘の間にフロン

1

2

3

4

FS-125部門／1.FP-Jr部門からステップアップしてきたばかりの小林利徠斗選手がデビューウィンを果たした。**2.**小林選手と同タイムだったが、判定の結果2位になった渡部智仁選手。**3.**吉田馨選手は10番手スタートながら地道な走りで3位入賞となった。**4.**FS-125部門入賞の皆さん。

FP-3部門／**5.**FP-3部門入賞の皆さん。**6.**デッドヒートを繰り広げたが惜しくも2位となった山本祐輝選手。**7.**川福健太選手は堅実にポジションを守る走りで3位表彰台。**8.**元KFドライバーのSASAKI TAIGA選手が、ここ一番の勝負強さを発揮して優勝を掴み取った。

FP-Jr部門／**9.**開幕戦のウィナーはポールの堂園鷲選手。オープニングラップの3コーナー手前の厳しいポジション争いを制すると、背後のバトルを利して独走を始め、一日を通じて一度もトップを譲ることのないパーフェクトウィンでデビュー戦を飾った。**10.**堂園選手の後方で繰り広げられた佐野雄城選手と佐藤凛太郎選手の接近戦は、4度のポジションチェンジの末に佐野選手の2位獲得で決着。**11.**昨年5位が最上位だった佐野選手は、嬉しい初表彰台だ。**12.**FP-Jr部門入賞の皆さん。

FP-Jr Cadets部門／**13.**FP-Jr Cadets部門入賞の皆さん。**14.**3位の岡澤圭吾選手は、予選でペナルティを受けて12位に埋もれたところからの9台抜きを披露した。**15.**2位は6番グリッドからスタートした春日龍之介選手。序盤から独走していた鈴木選手を0.3秒差まで追い詰め、逆転勝利にあと一歩と迫った。**16.**予選で6つ順位を上げて決勝のセカンドグリッドに着いた鈴木悠太選手が、1周目にポールの菊池貴博選手をパスしてトップに立つと一気にリードを広げ、2年目の初優勝を果たした。

トフェアリングが規定の位置からずれてしまっており、無念の5秒加算ペナルティで5位に降格。判定によって勝者の指名を受けたのは小林選手だった。大逆転でデビューウィンの小林選手は、「最後はラインが偶然空いたって感じでした。地元ではないコースで優勝できて嬉しいです」と喜びを語った。

渡部選手は自己最上位の2位。あと一歩で逆転勝利を逃した悔しさを滲ませつつ、「シーズンオフに去年の課題をいっぱい考えて練習した成果が出たのかな、と思います」と今後に向けての手応えを口にした。

3位になったのは吉田馨選手。大宮賢人選手とのバトルで最終ラップの逆転を成功させ、全日本2年目の初表彰台を獲得した。

FP-3部門の決勝は、スターティンググリッドの最前列に並んだ2人、かつてKF部門でトップコンテンダーとして活躍したSASAKI TAIGA選手と、ローカルレースの全国大会で日本一に輝いた“KTエンジンマイスター”山本祐輝選手のマッチレースとなった。

オープニングラップに山本選手が先頭に立つと、SASAKI選手がそれに続き、2台はタンデム走行で周回を続けていく。そして、残り4周で熱いファイトを開始。最終ラップの複合コーナーでSASAKI選手が2度目の逆転を果たし、緊迫の接戦を制した。

実はSASAKI選手は、予選ヒートでも最終ラップの複合コーナーで山本選手を抜いている。この時のSASAKI選手は、やや距離のある位置からズバリとインを突いて決勝のポールを獲得したのだが、それと引き換えに手の内をひとつさらしてしまっていた。そこで決勝最終ラップのSASAKI選手は予選と抜き方を変え、複合コーナー進入の手前から山本選手のインに並びかけて勝利をつかみ取った。優勝こそ逃したものの、山本選手もJAF選手権のデビュー戦で堂々の2位獲得だ。

経歴の異なる2人の見応えのある優勝争いに、ギャラリーからは「いいレースだったね」と称賛の声が湧いていた。

新規則のニュートラリゼーションとは？

日本カート選手権に今季から採り入れられたのが『ニュートラリゼーション(中立化)』だ。これはコース内に障害が発生した時、それが赤旗提示でレースを止めるほどの事態ではなかった場合に、レースを続行しながら障害が排除されるまで全車をペースダウンさせる手法。競技長がニュートラリゼーションを指示すると、全ポストでは黄旗の1本振動とともに“SLOW”ボードを提示。その時点でトップの選手をペースカーとして、“ニュートラリゼーション解除”の緑旗が出されるまで一列縦隊の走行が続けられ、この間のラップはレースの周回数にカウントされる。

東西両地域の開幕戦では、決勝前日にこの新たな規定の練習時間が設けられた。もてぎでは手順の説明と質疑応答にしっかり時間を割き、その後部門ごとに全車がコースインして“実技演習”を実施。選手たちは導入されたばかりの新システムを開始から解除までに渡って体験して、いざその時に備えていた。